



滝野隆浩
社会部編集委員

◎若林健次

お墓を巡る旅。アメリカに着いてまず行くべきは、首都ワシントンからポトマック川を渡ってすぐのアーリントン墓地だろう。公式訪問の各国首脳が多くが、ここで花を手向ける。

聖徳大学の長江曜子教授(61)は1989年、同墓地にあるケネディ第35代米大統領の墓を訪れた。小6のとき、単身渡米した祖父からこの墓地のスライドを見せられてから、一度は行ってみたかった場所だった。実際に墓のある丘の上に立って気づいた。リンカーン記念堂やホワイトハウスまで一直線に見渡せる。あっ、ケネディはいまもこの国の民主主義を見つめていると思った。△国が何をしてくれるかではなく……▽。あの有名な就任演説の一節も刻まれてあった。墓はメッセージなのだ。

広い墓地を歩くと、兵士の白い墓石がどこまでも整然と並び、丘の上には将軍たちの、もつと立派な区画がある。戦争を続ける国だから、ここでの埋葬はいまも続いている。身元不明の兵士をまつた「無名戦士の墓」。裏手にある海兵隊記念碑は、有名な、硫黄島の戦いで星条旗を立てる兵士の写真をもとにつくられた像だ。「見ているうちに、泣けてきました」と先生は思い出す。
そして、ポトマック川の橋を

命の大切さ考える場所

渡って、ワシントン側のリンカーン記念堂の近くに、ベトナム戦争戦没者慰霊碑があった。当時、全米「お墓大学」で研修中だった長江先生は、知人に「あなたもぜひ、見ておくべきです」と勧められたという。

「メモリアルウォール」は高さ3.67×長さ75.9の巨大な黒御影石でできた壁だ。そこに5万8000人以上の戦死者の名前が刻まれている。まず名簿で見て場所の見当をつけてからでないと、名前は探せない。愛した人の名前を見つけて壁面にキスする人がいた。紙を当てて鉛筆でこすっているのは、名前を持ち帰りたいから。大切な若い命が見たこともない戦地で散った。その事実を受け入れるには、石に刻まれた名前を確認するしかなかったのだろう……。

エール大の学生だった建築家「マヤ・イン・リン」の作品が、同慰霊碑のデザイン公募で1位となった。巨大な石に、戦死者名をひたすら刻んだデザインをめぐって、当時、大論争となっていたらしい。退役軍人は「恥辱の黒い傷」と非難した。だが、数十年を経て、いま、碑は多くの人が訪れる慰霊の場所となった。そこで名前を確認し、触りながら、国の栄誉として葬られた兵士の死を、近しい人たちはただただ悼むのだ。

「改葬」のことを考えて始まったこのコラムは、45カ国の墓を見て旅した長江先生に連れられて欧州の美しい墓地を回り、いま米国で、戦争と戦死者の慰霊のことを考えている。戦争で死ぬということの意味も。先生は静かに言った。「墓地がない国はありません。それは政治の場ではなく、命の大切さを考える場所なのです」